

4月講話会 報告

一般社団法人すてきな大分を伝える会

新緑の美しい季節になりました。皆様お変わりなくお元気でお過ごしのことと存じます。

先月の講話会は、有名なキリストン大名大友宗麟の若き時代にスポットを当て「『大戦国史』の中の大友義鎮」について学びました。大分市で大友氏の顕彰を進めている佐藤弘俊副理事長をお招きし、お話を



拝聴致しました。「宗麟が生き抜いた16世紀の豊後・府内（大分）は、実は、私たちの想像をはるかに超え、栄え、活気づいたまちで、大友宗麟は、世界史の最先端の舞台に立っていたのです。このことを県民の皆さんにもっと知って欲しい」と佐藤講師は、熱く語られたのでした。その中のいくつかをご紹介いたします。

- ① 日本の戦国時代を、世界史の動きの中で捉えることが大事。長篠の戦いで勝者となった織田信長ですが、勝敗を分けたのは、鉄砲ではなかったのです。絵巻にも出ているが、武田方も実は、鉄砲は持っていました。違いは、銃弾用鉛の入手にあったのです。鉛でないと暴発の危険があり、信長は、この鉛の支援を宣教師カブラルより受けていたのです。当時の宣教師の記録で最近明らかになりました。その宣教師たちを信長に紹介したのは、大友宗麟であったと見てています。（佐藤講師説）
- ② 若き宗麟（義鎮）16歳の時、ポルトガル人襲撃阻止事件（1545年）が発生します。水先案内人（中国人）のそそのかしを受け、国主の父（義鑑）が、府内に入港した6,7人のポルトガル人を、財物の略奪を目的として襲撃しようとしたのです。この時、義鎮は、国主であった父義鑑に直ぐに取りやめるべきことを訴えたのです。遠く異国の地からきた罪のない人を殺すべきでないこと、己の利のための殺害はあってはならないこと。我が国の港を信用すればこそその来航であり、これはむしろ名誉なことで国主にとって有利なことである。その殺害行為に義鎮は同意できない。義鎮は、彼らを助けるためには、死ぬ覚悟であるとまで訴えたと言われます。正義感に溢れ、器も大きく、中長期的に判断ができる若き宗麟像が彷彿される出来事がありました。这一件以来、義鎮に対するポルトガル人の信頼は、一層強固なものとなつたことでしょう。

- ③ 国主大友義鎮（22歳）が、礼をもって宣教師ザビエル（46歳）を迎える（1551年）



対面するザビエル（左）と大友義鎮（右）

ヴァン・ダイク画

義鎮が大友氏当主となった頃から、南蛮貿易が盛んになり、栄えていきます。義鎮は、貿易だけでなく、西洋の新しい文化やキリスト教にも関心を向けて行きました。また南蛮商人より、宣教師ザビエルは格別に高い品格を備えた人物であることを聞き、義鎮は、是非とも豊後にと山口で布教活動をしていました。ザビエルに「一日千秋の思いでお待ちしています。」とその切実な思いを伝えました。この手紙は、ザビエルの心を捉えました。左の写真は、その対面が果たされた歴史的な場面で、画家ヴァン・ダイクが描いたものです。（ドイツのヴァイセンシュタイン城に飾られている。）豊後の国主が、宣教師ザビエルを迎えた舞台は、ここ大分の府内だったのです。ザビエルの日本宣教の苦悩

を知る他の宣教師や同行者たちは、この場面には深く感動し、涙したと言われます。佐藤講師は、この絵を大分市に是非（レプリカでも）購入して市民の誇りにして欲しいと話されました。（裏面続き）

④ 南蛮文化 これは、西洋文化そのものではない。日本文化と西洋文化が融合した世界でこれまで見たことも聞いたこともない新しい芸術（音楽、絵画、演劇等）、医学等の特有の南蛮文化がこの大分に生まれました。それが南蛮文化です。その一例ですが、『六段の調べ』（筝曲：ことの演奏曲）という名曲は、このような背景から誕生したと言われます。こここのところは、次の講話会の機会（今年の12月頃にと依頼中）に是非お話ををしていただきたいと思います。（青井勝久記）

◇ ◇ ◇ ◇ 5月・6月 講話会お知らせ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

5月25日（土）10時より開会 『久留島武彦の童話の世界』

講師：大分県立先哲史料館 元館長 大津祐司 氏
於：ホルホール大分 408会議室 参加費 500円/人

6月29日（土）14時より開会 『若人の夢づくりと大分の魅力』

講師：家庭と未来研究所 所長 松本雄司 氏
於：ホルホール大分 403会議室 参加費 500円/人

《お問い合わせ先》一般社団法人すてきな大分を伝える会 青井勝久 TEL 080-3865-7104

E-mail k-aoi1005@outlook.jp

以上